

優秀賞

二人三脚ということ

中央大学 2年 遠藤 郁奈

私は今春、所属するサークルで合宿の副実行委員長を務めた。私が所属するサークルでは、実行委員長と副実行委員長が二人三脚で合宿を創ることになっている。参加者七〇人の合宿創りは、到底一人でできるものではない。しかし、私は準備期間中、委員長がした仕事を信用できなくなってしまった。仕事が回らなくなり、サークルを楽しめなくなつて初めて、どうして相手を信用できないのか考えた。そして、仕事のペースや理想の違いから、「始めから私がやったほうが早い」と相手を拒絶していたことに気が付いた。そこで私は、仕事を分担する際に自分の理想を伝えてみることにした。相手も承諾してくれて、その仕事は進んでいった。しかし、二人の理想が完全に一致するはずもなく、やはり上手くいかない点がでてきた。楽しい合宿を作るべき二人が、険悪な雰囲気のまま合宿を迎えるわけにはいかないと思ひ、仕事を上手く分担できないことを先輩に相談した。すると先輩から「信用できないあまり、相手の悪い所ばかり目がいつてると思う。君は今できることを精一杯やってみようけど、相手も相手にしかできないことをやっているはずだよ。」と言われた。私は、はっとした。私は、不快感から相手を僻見し、相手を認めること、相手の考えを受け入れることを忘れていたのだ。私は、まず、委員長がしてくれていることを素直に認めた。そして、納得いかないときも「私がやった方が…」と切り捨てず、お互いの妥協点を探した。すると、それまでのストレスは大幅に解消され、合宿当日まで忙しくも楽しく過ごすことができた。この経験から、自分のことを見てくれる人がいて、ヒントをくれることを知った。そしてその方から、素直に人と向き合うことの大切さを学んだ。それは、誰もが知ることのように本当に難しい。この経験を軸に今後人との付き合い方を追究し、誰かにヒントを与えられる人物になりたい。